■島嶼スケッチ

第２回ふるさと喜界島交流フェスタ IN 鹿児島を終えて

生島　常範

「ハゲー〇〇ニーサン！ナッカサヤー！ゲンキデンナ？」（あら～，〇〇兄さん！本当に久しぶり。お元気でしたか？）あちこちで再会を喜び，お互いの健康を称え合う喜界島方言が飛び交う。６月26日（土）夕刻，鹿児島市民文化ホール４階小ホールロビー内はにわかに島の雰囲気になってきた。開演を待つ鹿児島本土在住のシマッチュ（喜界島出身者）は懐かしい顔に会えることを期待しながらやってきたので素直に心の底から湧き出る喜びを表現できる感嘆詞の「ハゲー！」を連発している。共通語には訳しにくい言葉の一つである。

やがて開演の午後６時となった。実行委員長，鹿児島喜界会会長，喜界町文化協会長のあいさつに続き，島唄，エイサー，ふるさとソング，新民謡に日舞の舞台が続く。喜界島出身者を中心に内外の友情出演を交え「少量多種」の盛りだくさんのプログラムであった。開演直後の客の入りが思ったほどでなく，「ひょっとしたら赤字になるかも・・・」と事務局を預かる身としては気が気ではなかったが，鹿児島にも「島時間」は存在するのか午後７時頃になると400人収容の小ホールは満席となり，立ち見も出る嬉しい結果となった。受付で前売り券回収の精算作業をしていた私の椅子も客席へと持ち運ばれ，以後は蹲踞の姿勢で続行せざるを得なくなったが，感激のあまり痛さも忘れるほどであった。

我々が鹿児島の地で「ふるさと喜界島交流フェスタ」を開催したのは，島内外に住むシマッチュの出会いにより情報や意見の交換できる信頼関係を構築するためであり，出身者のふるさとへの熱き想いを島に住む者に伝えると共に「ふるさと喜界島」を語り，行動を移せる土壌を創っていきたいと思ったからである。もちろんそんな大きなことを考えていても，所詮は民間の若者達が中心となって企画したイベントなので，急に環境変化が起こることはないだろうが，いろんな意味で今回の試みは画期的であり，必ずや今後のしま興しの活動に影響を与えるものと信じている。

先ず，半年前の企画の段階から鹿児島喜界会の後援を得て，会長，事務局長さんを始め会員の皆さんに相談しながら細部に渡って助言を頂き，準備ができたことが成功のカギであった。喜界会という組織を頼って電話，ＦＡＸでの連絡だけで殆どの方は当日会場で初対面という関係である。喜界町の後援は得ていても，中心に動いている実行委員長も事務局も民間人で，何の肩書きも持たない我々の途方もない企画への協力をお願いしたにも関わらず，どの先輩方も終始温かく激励の言葉と助言を忘れなかった。更には喜界町アンテナショップ事業推進協議会の後援を得て，同事業に賛同する県本土にある出身者の店舗でも前売券販売の煩わしい仕事を引き受けてくれた上に，広告協賛への協力も快く応じて頂いた事などが遠隔操作で準備を進めざるを得ないことからくるもどかしさを痛感していた実行委員会に元気を与えてくれた。スタッフが島外にも存在するような心強さを感じたものだ。喜界島内でのイベントは何度も経験した我々ではあるが，島外での開催となると先ず経費がかさむ。資金ゼロでしかも金銭的支援も無い状態ではあったが，絶対赤字は出すわけにはいかない。島内外からの出演者の経済的負担を出来るだけ軽減し，次への意欲に

つながる結果を出さねばならない。本番1週間前になると，実行委員はこうしたプレッシャーと戦かっていた。我々は本番3日前のプログラム印刷直前まで島内外の広告協賛を募り，連夜の深夜作業でプログラムを作り，輪転機で印刷し4500枚の紙を持って実行委員長が一足先に上鹿。表紙だけは見栄え良くしようと印刷屋に依頼し，本番直前，スタッフ総出の装丁作業で手作り感十分のプログラムが完成した。

近年喜界島出身者の組織及び個人の方々の喜界島へのかかわり方がより一層強くなってきた。以前から関東，関西，福岡，鹿児島，沖縄に喜界会（郷友会）が存在していたが，数年前からそれらが「全国喜界会連合会」として団結し，2年に1回喜界島で総会を開いて町当局とふるさと活性化に関して各種の検討会などを開催している。また，前述した喜界町アンテナショップ事業の提案者も出身者の方であり，新種の産業導入や新産品開発にも積極的に関わり地元の信望も篤い。現在全国に「喜界島大使館」が誕生しつつあり，「喜界島応援団」が島をＰＲしている。その他出身者から町当局へ産業興しの提言書なども届いており，これまでの「遠きに在りて郷愁にひたる」郷友会から「島のために動く」郷友会へと変わりつつあるように思う。このことは，奄美出身者全体の動きでもありそうだ。折りしも本日（平成16年6月28日）付けの南海日日新聞「記者の目」に「変貌する奄美出身者社会」「生かしたい出身者の智恵と力」「相次ぐ島おこし支援団体設立」・・・とあり，各地で政策提言活動やシンクタンク機能を担い，フォーラムを開催しているとあった。昨年の奄美群島日本復帰50周年や奄振法延長問題がそうした動きの契機となっていると思われ，時を同じくして鹿児島大学の公開シンポも名瀬市で開催され，白熱した議論が展開されたことは記憶に新しい。私もUターンする前そうであったように，島外在住の出身者には「島を出た人間」という一種の負い目があり，ちょうどバックネット裏から熱狂的に野球の応援をするしかないという遠慮があるのは確かだろう。しかし。最近の傾向は選手とまではいかなくとも，共にチームを育て，ベンチで見守るコーチ，トレーナーのような関係まで近づいてきているような気がする。こうした傾向は生き残りを賭ける島にとって歓迎すべきことだと思う。島には従来から「島番サー」という言葉がある。簡単に訳すと「島の番をする者」つまり，「島を守る者」であり，出郷者の「島のことは任せたよ！俺達は外で頑張るからな」に対して使われる言葉である。しかし，時代が変わり，今や地元に住む者だけで島を守る事は難しくなったことは誰しもが認めるところであり，外の応援団の力を借りない手はない。そうした時代の要請に対して郷友会組織が積極的に動き出したとみることができる。大学の研究者が奄美の振興について真剣に研究を重ね提言をしてくれる上に，出身者の支援態勢の充実は正に鬼に金棒といえる。

さて，問題は我々島に生きる者がその力をどう活かし，どう応えるか？そんなことを考えながら，「第3回ふるさと喜界島交流フェスタはどこで開こうか？」と疲れきった仲間達と黒糖焼酎を酌み交わしながら話しているところである。

プログラム「六調」でステージだけではなく，客席でも一緒に踊っている様子